

---

# ゼロの使い魔 ～異世界奔走記～

貧ジャック

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔 ～異世界奔走記～

### 【Nコード】

N9753Y

### 【作者名】

貧ジャック

### 【あらすじ】

シャイターの門が武器を調達した際、人間も調達してしまったようです。この二次創作は地球から飛ばされたオリ主が異世界で奔走するお話です。

筆者は初心者かつ初投稿です。拙い文章ですがよろしく願います。

**第零話 リクルートは空に舞う(前書き)**

初投稿です。よろしくお願いいたします。

## 第零話 リクルートは空に舞う

「アジア某国某街にて」

私はとある会社員兼研究者、理由<sup>わけ</sup>あつてこの街を訪れている。

つい先ほど、企業から連絡があり、急ぎ身支度をしている。相手先が急遽、予定を変更してきたとのことだ。

「やれやれ、ホテルにチェックインして、早々にチェックアウトすることになるとは思わなかったな」

愚痴をいいながら、長年愛用しているスーツに身を包み、心を入れ替えるため鏡に向かって営業スマイルの練習をする。

にやり

・・・誰がどう見ても悪人の笑みです、本当にありがとうございます。まだまだ訓練が必要だなこれは。

兎に角、これで心の切り替えができた。資料やノートPCなどの手荷物をアタッシュケースにまとめて、部屋を出る。

相手は既にエントランスで待っているとのことだ。急な予定変更とはいえ、これ以上待たせてしまっては相手の心証を害してしまう。

「こんにちは、織田義昭<sup>おだよしあき</sup>さん。お会いできて光栄です」

エントランスに着いて直ぐに、丁寧な日本語を話すビジネスマンに話しかけられる。

金髪で角刈りの中年美丈夫<sup>ナイスミドル</sup>、そして珍しい月目<sup>オッドアイ</sup>、うん、写真で見

た人物だ。

実にダンディな雰囲気醸し出している彼が、クライアントの指示した相手、チエザーレ氏で間違いなさそうだ。

「こちらこそ、お会いできて光栄です。チエザーレさん」

まずはお互いに握手を交わす。すると彼は、まるでお手本のような満面の笑みで・・・

「早速ですが織田さん、貴方をマフィアから保護させていただきま  
す」

「は？」

FBIの証明書ハッチを見せながら、実に物騒な言葉を吐いた。

〈 原作 ゼロの使い魔 〉

私・・・いや俺こと、織田義昭は追いかけられている。

鬼ごつこの相手は、絵に描いた様なゴロツキ共が10人以上。最初は人種も姿も違う、まったく関連性の無い連中だと思っていたが、素人の俺にもわかった事がある。

一つ、奴らは皆、拳銃やら刃物やらで武装している者ばかり、つまり堅気の間人達ではないこと。

二つ、そんな物騒極まりない奴らの目標が俺であること。まあ、俺の荷物が目的なのかもしれないが、どっちでも同じこと、鬼に捕まれば確実に酷い目にあう。

炭酸一気飲みしたらゲップがでるくらい確実だ。

） 二次創作 IF ）

パパン！  
パンツ！パンツ！

「うおっ！？畜生、撃つてきやがった！」

逃走劇開始からおよそ数十分、連中は痺れを切らしたのか発砲してきた。一発も俺に当たっていないのは威嚇射撃だからなのか、はたまた連中がへボなのか。・・・できれば後者であってほしい。いやホント、マジで。

「HEY！ビビってんならそのまま止まっちまえよ！」

汚い英語で喋るな聞き取り辛い、あとこの状況で止まるバカはいないだろ、と心の中でツッコミつつ裏路地からメインストリートへ抜ける道へ入る。

街の地理を覚えていて向かう目的地も明確だが、こんな場所を逃

走経路に選び延々と走り続けるのはバカか阿呆かドMだと思う。

もつとも、逃げつつも相手のセリフを聞き取るうとする俺はバカか阿呆に分類されるんだろうな。

） 異世界奔走記 ）

ホテルでの一連のやり取りの後、FBI犯罪捜査官のチエザールさんとその仲間に連れられ車に乗る。

「ここは危険な街だから」

そう言いつつ、万が一に備えてと、仲間の居場所を記した手書きのメモを渡される。しばらくメインストリートを通っていたが、途中で事故が起きており通行止めされていたためサブストリートへ迂回する、ここまでは何事もなく問題なかった。

問題は何故俺がマフィアに狙われているのか疑問に思い、チエザールさんに問いかけようとしたその時だ。

前方の護衛車が月面宙返りよろしく盛大に吹っ飛んだ。

鬼ごっこ開始の合図は爆音だった。

〈 第零話 リクルートは空に舞う 〉

バンバン！

タン！タン！

ガガガガガ……

襲撃してきたのは黒いスーツで身を固めた男たちだった。銃撃戦の中、俺はチエザーレさんに護られ車の陰に隠れていた。

しかしこの人、二丁拳銃使いとは。乱戦にも関わらず命中率が恐ろしく高い、それも相手の急所へだ。跳弾でヘッドショットとか・  
・これがチートという存在か。

「織田、銃は使えるな？」

「は、はい」

急に呼び捨てで話かけられ、緊張で声がどもってしまった。そんな俺を見たチエザーレさんは落ち着けと言いつつ、おもむろに拳銃をホルダごと渡してきた。ご丁寧に予備のカートリッジを添えて。

護衛対象の俺に拳銃を渡すのはどうかと思ったが、一緒にいたFBIは全滅、少しでも戦力が欲しいのだろう。俺が訓練を受け拳銃

の心得がある事を彼が知っていたのは、事前に調べていたのだろうと勝手に納得していた。

しかし半素人が参戦しただけで状況が変わるわけがない。結局、チエザーレさんは黒服共の注意を引きつけつつ、メモに書いてある場所まで逃げると言い放ち俺だけをこっそり裏路地へ逃がしてくれた。

だが、逃走途中で追っ手らしき男に見つかり、後は襲われるがまま、流されるまま。気づけば裏路地で十人近い男共に追いかけられていた。

・・・途中まで俺を護ってくれていたチエザーレさんは無事なのだろうかと気になったが、まずは自分が逃げ切ることを考えるのが先だと無理やり思考を変えた。

そんな中、路地の三つ隣がメインストリートだと気づき、少しでも人目のつく場所で逃走したほうが良いのではと考え、現在に至る。

8

連中が他の足を用意している可能性もあったが、人目につけば他のFBIが探しやすくなるだろうし街の警察機構も対処してくれるかもしれないという、かなり運頼みな算段だった。

・・・当然、そんなに世の中甘くない。

「イイ尻ケツの男でも、流石にここは通せねえぜ」

メインストリート手前でガチムチ工事夫共に行く手を遮られた。よく見ればこいつらの左脇も不自然に盛り上がっている。ってことは事故のため通行止めつても奴らの仕業だったか・・・

・・・ちなみに俺は、こと日本という国において不細工と呼ばれ

る面構えだ。中肉中背でガタイもそんなに良くない。ゆえに、ガチムチ野郎のセリフはきつと冗談だ、冗談であってくれ、冗談でなければ命以外の大切なナニかが・・・

### 閑話休題

「ここがお前のデットエンドだ！もう救援は来ないぜ？」

裏路地を走り回っている間に増援を呼ばれていたようだ。最初の倍ぐらい人数がいる。前も後ろも大勢の野郎共で囲まれた。

「いい具合にハマったね、後は神様にお祈りでもするよろし。ボンクラは仏教徒アルか？」

いや、野郎だけじゃなく、何故かチェンソーを持ったゴスロリとか、刃物を持っていたいかにも中華風の姉ちゃんとか、色々と危ない女性が数人いた。すげえシユール・・・って、何を呑気に考えているんだ俺は。

「まだだ、まだ終わらんよ！」

余計な思考をカットして行動に移る。貰った銃をガンホルダーから取り出し発砲、威嚇をしつつ横にある建物の非常階段を登る。

俺には人を殺すなんて覚悟はまだ持てそうにない、威嚇射撃が限界だ。

「お、あいつ銃なんて似合わねえ物、持ってやがったぜ？じれつてえ、こつちも撃つか」

「おい、馬鹿やめろ！・・・運がいいな日本人、面倒くせえが、てめえは五体満足で連れてこいって依頼だ」

五体満足が条件とはいえ、もし相手に当てていたら手足の一本や二本は撃ち抜かれていたかもしれない、奴らなりの正当防衛ってことで。

とはいえこの捕獲条件は俺にとって大きなアドバンテージだ。連中は無暗に俺を傷つける事は出来ない。

ならば、追いつかれない限り逃げ続けることができる。建物に入っても屋上を飛び移っても何をしてもFBIがいる場所まで行くことができれば俺は助かる。そうとも、行けるさ！必ず俺はイける！

「無駄無駄、さっさと諦めな」

「いやあ、悪あがきする男もわるくねえな」

「トミ！トヤネナマタルオドエ！」

・・・二人目からの発言はスルーで。5階建ての階段、残り2階分登れば屋上だ、ちなみに、非常階段の扉は無情にも開かなかつた。ちくせう、開けとけよ非常口ぐらい。

「あいや、もう面倒ね。全身打撲ぐらいなら問題無い違つか？」

さてなんか今、不吉な片言英語が・・・

ガキユ！ガキユキョン！

め、目の前で起きていることをありのまま話すぜ！

中華女の投げた鋼線付きナイフ　・ククリナイフのような物・  
がまるで生き物の如く蠢き階段を切り裂いていく、俺を避けて鉄製の階段だけを・・・つて！！？

「なにいいいい！！？」

こんな状況、誰であろうと叫んだはずだ。急ぎ何かに乗まろうとするが、右手にアタツシケース、左手に拳銃、ダメだどちらも手放すことができない、いやでも・・・などど考えているうちに階段が完全に崩壊する。

足場を失えば、後はニュートン先生の出番です。途中、スーツの上着が残った階段の残骸に引っかかるがもはや勢いは止まらない。  
上着が剥がれた拍子に力が加えられ、アスファルト大地と蒼天を交互に仰ぎながら落ちる、つまり絶賛きりもみ回転落下中。

「はいはい、これで鬼ごっこは終わりよ」

さらに中華女はもう一本の鋼線付きナイフを巧みに操り、そのワイヤーを俺の体に巻きつける。周りのゴロツキ共は歓声やら罵声やら叫んでいるが、俺は聞く耳を持つ余裕が無い。

突如起こった目の前の現象に思考を奪われたのだ。

青黒青黒と交互に代わる視界が急に青緑青緑と変わっていったの

だ。

そして・・・俺の体と意識は・・・緑の光に飲み込まれていった。

「お、おい。野郎消えたぞ!?!」

ナイフ一本釣りで落ちてくるはずの男が忽然と消え、一瞬ゴロツキとマフィア達は愕然としていたが、次第にざわめき言い争いが始まった。

「おい、片言女ですだよ！てめえ奴を何処に隠しやがった!?!」

「馬鹿言つな尻軽女！ワタシにもわからないよ!」

「ちっ、稼ぎ損ねただけじゃねえんだ、どうすんだよこの始末!?!」

ぎゃあぎゃあ言い争う女共を尻目に、男娼屋のような男が、落ちてきた鋼線を手に取りまじまじと見つめる。

「ワイヤーが途中で切られてる。恐ろしく綺麗な切断面だね」

跡に残るは切り裂かれた階段とスツパリ切れた鋼線、そして路地の宙を舞うスーツの上着だけであった。

## 第零話 リクルートは空に舞う（後書き）

物語のヒント

織田義昭

本二次創作のオリ主。

見た目はキモくはない、しかし表情が怖い。

笑ったその顔は・・・察してください。

射撃の腕前は・・・お察し願います。

彼の境遇は次回。

チエザレさん

本名 ガウン・チエザレ

FBIの犯罪捜査官。

ある事件の捜査でオリ主がマフィアに狙われている事を知り、仲間と共にオリ主を保護する。FBIが誇る天然チート。数の暴力により生死不明、生きているといいですね。

危険な街

某国にある悪の楽園ロア プラ。

DM

ドレッドノート級マゾヒストまたはドレッドノート級マゾヒズムの略。

肉体的精神的苦痛を他者から与えられることによって、または羞恥

心や屈辱感から、極度の快感を得る者を指す。  
場合によって変質者扱いされるので注意が必要。

ガチムチ

筋肉質な人を示す言葉。男性だけでなく女性にも用いられる。  
決してア、ー なことをヤル人物を指す言葉ではない。

「トミ！トヤネナマタルオドエ！」

おい！おまえらはやくのぼれ！と追っ手は申しております。  
解説には特殊な辞書が必要。全部で26冊ある。

鋼線付きナイフ

中華女の獲物。ククリナイフのような刃物に鋼線または紐を付け、  
投擲時の軌道変更や後の回収効率を上げている代物。熟練の捌きが  
必須。

正式名称は筆者の勉強不足により不明。

緑の光

異世界への扉、ただし一方通行。

シャイターの門が頑張って開きました。

スーツ

オリ主の着ているスーツはリクルートスーツではありません。  
でも露語が良かったのでリクルート扱いになりました。

そもそも筆者にとってリクルートの定義があやふやなことが原因。

**第一話 目覚めは洞窟（前書き）**

半分以上が回想です。

## 第一話 目覚めは洞窟

視界が全て淡い緑の光で包まれている。未だ覚めない頭を働かせ現状を確認しようとする。

ここは洞窟のようだ、大きさは劇場オペラハウス くらいか、それより少し狭いくらい。TVで見たことがあった

磯の匂いがあることから直ぐ近くに海があるのだろう。洞窟なのに明かりがあるのは何故だろうかとよく見れば、発光性のコケのよ  
うな植物が岩に点在していた。

ここまで発光するのは珍しいもつと詳しく見よう、と起き上がる  
が思うように体が動かない。そして体中が痛い、特に体に食い込んで  
いる鋼線が。

「痛っ！・・・ああ俺、階段から落ちたんだった」

恐らくあの後、俺は連中に捕まりマフィアに引き渡され監禁場所  
であるこの洞窟に閉じ込められたのだろう。しかし体を拘束してい  
るのは鋼線のみ、しかも簡単に解ほどけそうだ。

・・・？

ここで少し違和感を感じたが、未知の植物がもたらす好奇心によ  
り”それ”は頭の外へと抜けていく。まずはナイフ付きの鋼線を解  
いて、詳しく観察する準備をしよう。

愛用のアタッシュケースから道具を取り出しコケへと近づぐ。

・・・あれ？

「なんで、俺のアタツシケースがあるんだ？わざわざ律儀にマフ  
イアが置いていったのか、いやまさか」

そんな優しいマフィアなんて存在するはずがない。

再び湧いてきた違和感はどんどん大きくなり、好奇心を徐々に打ち消していく。そもそも刃物が付いたままの鋼線で、傷つけてはいけない相手を拘束し続ける意味が無い。ここでようやく近くにマフィアがいるか辺りを見渡すが、マフィアどころか人ひとり見当たらない。

ふと右脇に手を添えると、貰った拳銃のガンホルダーがそこにあつた、予備のカートリッジが入っている状態で。急ぎ自分が倒れていた場所を見る。

「監禁する相手の武器を放っておくなんて・・・ありえない」

この時点で違和感は不安を孕んだ何とも言えない感情に押しつぶされる。現状はこう語っているのだ。あの後マフィアに捕まらなかったし、FBIにも保護されなかった、第三者の存在すらあり得ない。

そこにはチエザレさんから渡された拳銃、逃走の最後まで握っていたベレッタM92がコケの光を受け鈍く輝いていた。

とりあえず、何故”こんな事”になったのか、順を追って思い出そう。

俺の氏名は織田義昭、職業は会社役員兼研究員の24歳。彼女は・・・察してくれ。趣味は機械弄りと漫画そしてゲーム。左利きだが箸を持つ手は右だ。あと、二人の弟妹ていまいがいる。

「織田と義昭って、滅ぼす側と滅ぼされる側が同居してるよな」

よく友人達に言われることだ。

なぜ親がこのような名前をつけたのか息子の俺にも謎だ。まあ今更聞くのも野暮だし、何だかんだで結構気に入っている。

ちなみに第二候補は無道むどうだったそうだ。どちらにせよ友人達の話の種になること受けあいだ。

「ほら、兄貴って何でも直して、何でも壊すじゃん？親父達には兄貴の将来が見えてたんだよ」

「よし兄にいは小さい時から皆に良い事を沢山して、たまに悪いことを平然とするでしょ？だから母さん達はそう名づけたのよ」

当時、中学生だった弟妹が、高校生の俺に向かって言ったセリフだ。

「あのな・・・。両親はそこまで考えていないぞ、絶対に。そして

弟妹よ、お前達もなのか？友と同じく兄のガラスハートを粉碎する  
のか？」

年頃の弟妹は色々な意味で容赦が無かった。良くも悪くも俺に似  
てしまったか。

「よし兄のハートは分厚い鋼鉄でしょ？（言葉で）いくら叩いても  
なかなか凹まないし」

「もしくはメタトロン。終末とか望みそうだし」

うん前言撤回、俺より容赦がないよお前ら。この頃から兄の威厳  
は消え失せていたんだな、ちくせう。

・・・思考が脱線した。今、思い出に浸るのは止そう。そもそも  
誰に自己紹介してるんだ俺は。

俺・・・いや私がああ街を訪れたのは大きなチャンスを手にも  
ためだ。

家族で経営している会社は利益の6割が2次産業、残りが3次産  
業の類だ。当社の格付け的中の下といった立ち位置で、経済協定  
の影響をまともに受け必然的に経営が苦しくなっていた。

そんな苦境の中、朗報が入る。以前、研究機関に依頼していたと  
ある”成分” 新しいう有機肥料の研究中に、社長（親父）が偶

然発見したおそらく未発見であろう菌が生み出す成分　　の抽出方法が非常に有効であると認められたのだ。

その成分は有機肥料に使用することはできないが、医療関係者にとって新たな希望を見出せるものだったそうだ。

さらに国内の大手企業 HIRAGA が、ぜひそれを国際特許として世界に認めさせるべきだと協力者<sup>パトロン</sup>として名乗り出てきたのである。様々な好条件と共にだ。

ちなみに、当社は HIRAGA の傘下ということになっていた。社長がいつの間にか話を進めていたらしい。協力者になると近寄りつつ吸収合併、いやこれは一方的な吸収と言ってよいレベルだった。社長、せめて私や社員に相談して欲しかったな。寝耳に水だったぞあれは。

そんな経緯を得て無事に特許を取得できたのだが、各国から”成分”に関する演説や抽出方法の説明を要求する声が続かず、私は HIRAGA から各国の機関に説明する役割を与えられた。

英語を再学習するのがめんど・・・時間がなかったため、発見者の社長が説明に歩けば良いのではないかと進言したが、

「父親には護衛と共に各地の演説に行ってもらおうよ。発見者に大事があつたら大変でしょ？君なら何かあつても・・・げぶん、げぶん、君なら父親以上に上手に説明してくれると思つてね」

大雑把に言つてこんな感じに捉えることのできる説明を HIRAGA の重役から延々と言われ、却下となった。”成分”の抽出方法を見つけたのは私なんです、私には護衛をつけないんですか？そうですか。

・・・月夜ばかりと思うなよ？

そうして世界を奔走する中、企業から緊急連絡が入る。

「A国の大手製薬メーカーの重役が某国のとある街に滞在しており、そちらとの対談を望んでいる」

素直に好機だと思った。特許を認めても、いまだ保守的な姿勢を見せるA国。その大手製薬メーカーとなれば国内におけるシェアは計り知れない。取り入れることができれば弊社とHIRAGA、そして日本にとって大きな収入源となる。

しかし向かう街は治安の悪さで超が付くほど有名だった。しかも相手はその街から動くこととはしないようだった。

万が一だが罠の可能性もある。私はHIRAGAに相手の情報や街の地理などの資料を要求し、さらに護衛を依頼した。

そう、万全の態勢で臨んだはずだったが、実際はご覧のありさま。あの街のマフィアに嗅ぎ付かれ、それらから保護してくれるFBIもろともホットな鉛でダンスを踊ったわけだ。

もっとも、あの街に行く以前から狙われていた可能性が高いのだが・・・って、

「思い返しても、何でここに俺が居るか、全っ然わけがわからん！しかも携帯も圏外だし、洞窟の奥からグーグー音鳴ってるし、ぬわああああああ！」

先の件でもそうだったが、一定以上の理不尽不可解が襲うと俺はとことんパニックになるようだ。軍隊でも入隊して訓練しなけりや当然だよなー、なんて思いつつ頭を抱えながらぐりんぐりん振り回す。もはや思考と行動が分離してしまったようだ。

しかし、途中で自ら喋ったセリフにおかしな部分があったことに気付く。

「・・・グーグーと音が鳴ってる、だと!?!」

そう、洞窟の奥、いやコケの光が一番弱い箇所から呼吸のような音が聞こえるのだ。よく耳を傾ければ呼吸の他に鼓動のような音も聞こえる。人では到底出せない、重い音だ。

何か人以外の生物がいる!?!

直ぐに拳銃を取り残弾とセフティを確認し、構える。そして携帯の明かりを頼りに、ゆっくりと足を進め鼓動が何なのか確認しようとしたその時、

「いったい誰だえ? わらわの眠りを妨げる者は・・・」

あからさまに不機嫌で、そして深く腹に響くほど重く、しかしどこか優しさを含んだ声が”頭上”から響いた。恐る恐る見上げてみると、そこには・・・

「恐竜!?! しかも喋っただと!?!」

見たこともない大きな恐竜(?)の顔が睨みをきかせていた。

## 第一話 目覚めは洞窟（後書き）

物語のヒント

ベレッタM92

イタリアのベレッタ社が開発した自動拳銃。

本編の拳銃はM92FSだが、オリ主は拳銃に詳しくないためM92と混同している。

誤作動が少なく、安価であり、どちらの利き腕でも使用できる。米軍でも正式採用されている。

織田信長

よく魔王扱いされる不憫なお方。ぶるあああああ！

戦のみならず統治においても、当時としては画期的な戦略、政策を行っていたとされている。

オダデインの威力は異常。

足利義昭

信長を利用して天下を取ろうとしたが逆に利用されて滅ぼされた將軍。

残念ながら筆者はその程度しか覚えていない。ゴメンネ。

オリ主の一人称”俺”と”私”

仕事と私生活を分けるよう、心がけているようです。

仕事は”私”で私生活は”俺”といった具合。

メタトロン

数々のゲームや物語に登場する夢の金属。  
体内に取り込めば、人類の無意識と宇宙の意志を感じすぎて暴走すること間違いなし。週末を望んでいるのだ！。

国内大手企業 HIRAGA

発明家・平賀源内の子孫が創立したといわれる大企業。  
おもに医療関係と製薬関係、精密機械の分野に進出、貢献している。

ぬわああああ！

最後の時まで息子に意志を伝えようとした男の雄叫び。  
しかし本編の場合は混乱による錯乱の雄叫び。

恐竜

その巨体と風貌にあこがれる子供は数多い。  
大人でもあこがれる。  
でも実際に現れたらケツにツララを突っ込まれた気分になるだろう。

## 第二話 人と竜（前書き）

感想、アドバイス等ありましたら、ぜひお願いします。

## 第二話 人と竜

目の前には寝起きの恐竜。しかも人語を話すときている。思わず腰を抜かさなかった自分を褒めてやりたい所だ。

拳銃を構えず一目散に逃げる。戦えば間違いなく食い殺される。

ありえない！ありえない！！ありえない！！

俺にはその言葉しか浮かばなかった。恐竜は六千万年以上も前に絶滅しているはずだ。あれは現代まで生き残った未確認動物（UM A）だというのか！？  
混乱しそうな頭を落ち着かせようと何度も深呼吸する。

「安心おし。人間を食べるほど悪食じゃないよ」

今度は子供をあやすような優しい口調で話しかけられた。離れていても目立つ白く輝く目に見つめられ、俺は思わず口を開いてしま

う。  
「正直、食べないぞと言われても警戒してしまうんだが・・・」

一瞬きよとした顔になった恐竜だが、今度は口元を釣り上げて笑い出した。

「ふえふえふえ。随分と臆病な人間だね。何処から迷い込んだんだね？」

「せめて用心深いと言ってもらいたいものだ。」

それはさておき、ずしんずしんと巨体を動かし恐竜は俺に近づい

てくる。次第に恐竜の体に光ゴケの明かりが当たり、その全貌が明らかとなってくる。でかい、全長十五メートルはありそうだ。恐竜の頭にはサンゴのような角が二本生えており、全身は銀の鱗に覆われ光の加減で虹色に輝いていた。

） 第二話 人と竜 ）

人語を話す恐竜に敵意はなさそうなので、色々と質問をしたりされたりしていたのだが、どうやら事態は予想を遥かにぶっちぎって異世界まで到達していたようだ。

「おやおや、最初は気狂いの類かと思ったが、どうやら違うようだね」

「いやいや、散々話を聞いておいてそれは・・・」

酷いものだと言いたいが、こんな状況でお互いを理解するということも無理な話だ。しかしようやくこちらの事情を理解し始めたようだ。

もっとも、こちらがこの”竜”こと海母つみははの話を通じて飲み込めたのは、諦め5割、好奇心3割、適応力2割という無茶苦茶な思考回路が成せる所業だ。

海外を渡り歩いた俺の適応力に死角は無い。

「矛盾していないかえ？」

なんと、心を読まれた。何でもアリだなファンタジー。

兎に角、もつと詳しい情報が欲しいため、俺は暫く海母（うみはは）の巢（ねど）に居座ることにした。海母曰く、夜に騒がなければ居ても良い。あと食糧は自分で調達しとのことだ。

「・・・寝ているところを起こしてしまって、すまなかつたな」

「なに、気にしとらんよ。わらわも久しく人間と会話できたしね」

まったく、彼女（？）が温厚で助かったといったところだ。

・・・数日後

先の海母との会話、そして今までの生活の中で、幾つか情報を仕入れることができた。

一つ、彼女は恐竜ではなく竜であったこと。しかも人語を理解し、更には”精霊の力”と呼ばれる魔法を行使できる古の竜、韻竜と呼ばれる存在だったのだ。

実際、目も体も疑った。魔法をかけた海水を飲んだら海の中で息が出来、しかもその効果は2時間以上も持続したのだから。その時

の俺はヤックデカルチャーって顔していたと思う。

事のついでに潮風&防水対策として、海母に携帯食料を除く所持品全てに”不変”の魔法とやらを掛けてもらった。

しかし海母はこの手の魔法は苦手らしく、一日毎に掛け直さないと効果が切れるそう。残念、恒久的な物質の保護はどの世界でも困難なようである。

ちなみに後で聞いた話だが、海母が俺の所持品を見た所でようやく俺を異世界の住人だと理解したらしい。

二つ、ここは月が二つある世界であること。洞窟を抜け漁に行った帰りに夜空を見て驚愕したのは記憶に新しい。

洞窟に戻って海母にそのことを尋ねると、何を当然のことを言っているんだえ?といった具合で、かなり残念な目で見られた。ぐすん。

「いい年した坊やの嘘泣きは気持ち悪いねえ」

・・・すみません。

三つ目、この世界には人間の他にエルフや吸血鬼、羽翼人といった種族が数多く存在することだ。彼らは韻竜と同じく、”精霊の力”を使うことができるそう。

てつきり俺は人型の知的生命体は人間だけと思い込んでいたのだが、海母の話ではこの海域の先に広大なサハラと呼ばれる砂漠があり、そこにエルフが住んでいるネフテスという国があるそう。

なお、人間はサハラから西の方面と東の方面に分かれて暮らしており、人間とエルフとの関係は最悪とのこと。戦争でもやらかした

のだろうか？

四つ目、人間も魔法を使えるということ。ただし、韻竜やエルフ達が使う”精霊の力”と根本が同じだが精霊の扱い方が違うそうさ。

「わらわ達は精霊に願うことでその力を借りているのじゃが、人間は精霊に命令をして力を行使するのじゃ」

うん、ややこしい。そもそもこの世界に精霊なんて存在がいるんだな、初めて知ったよ。

「どちらも俺にとっては魔法のようなものだ。なら、俺は両方とも魔法ってことで理解するさ」

魔法を使える人間は限られていて、彼らはメイジと呼ばれ特に西の方面に多くいるそうさ。魔法使いとか・・・もしかしたらホグワーツみたいな学び舎があったりするのかもしれない。

そして5つ目、ここ辺り一帯の海域と土地には地球の武器・兵器が無造作に捨てられていることだ。時代と国に左右されることなく、そつまるで博物館のごとく。

残念ながら使えそうな武器を見つけたことはできなかつたが、ベレッタM92で使用できる弾丸が入ったのは大きな収穫だった。合計50発以上。

もっとも使う機会が無いことを俺は節に願っている。物騒は嫌いだ。

日も暮れはじめた時間、たき火を起こし、魚を焼きながら色々と考察する。

「うーん、サハラ砂漠つてのを地球の地理に当てはめて考えると、西はヨーロッパ、東はアジアってところかな？　・・・いかんいかん、もはや地球の常識は通用しないんだった」

今日、見聞きしたことを思い出しながらメモ帳に書き込んでいく。日記のようなものだ。漁の腕前上達も重要課題だが、日々集めていく情報の整理もまた重要なのだ。

未知の土地では情報の有無が命運を分ける。俺は地球に帰る方法を見つげるために、何れは”ここ”を旅立つつもりだからだ。

もつとも、ここで帰る方法が分かるのが一番楽なのだが、今のところ収穫はゼロだ。

「おやおや坊や、今日の夕食は小魚一匹かえ？」

そんな事を考える俺を知ってか知らずか、海母は何時ものように俺をからかってくる。冷やかしかはお帰りくださいと言いたいところだが、生憎と家主は俺ではなく海母だ。しかも毎日、所持品の保護を行ってくれる存在ゆえ、ここはグツと堪える。

ちなみに海母の食事方法だが、本人曰く、

「口を開けて適当に泳げば魚で腹が満たされるよ。うらやましいかえ？」

だそうだが、まるでクジラのような食事方法だな。嗚呼、テラうらやましす。

しかし、俺にとって初のサバイバルなんだ。簡単に、獲ったどー

的な能力を手に入れることなど出来ない。誰でも最初の内は苦労すると思うけどな・・・

「長耳<sup>エルフ</sup>のはねつかえり娘だって精霊の力を使わず上手に捕っていたもんさ。坊やは泳ぎといい漁といい、よほどの不器用じゃないのかえ？」

うわ、酷い言いようだ。確かに泳ぎも漁も苦手だが、不器用ではないぞ。これでも機械整備が得意なんだ。ってか、エルフのはねつかえり娘って、誰？

・・・ふとここでエルフについてまだ聞いていなかった事を思い出し、海母に尋ねてみる。

「なあ、海母。エルフはネフテス以外に住んでいないのかい？」

海母は少し間を置いてから、

「そうさね、殆どのエルフはネフテスに住んどるよ。ごく稀に抜け出す者もいるが、本当に稀な話さ」

と答え、どうしてそんな事を聞くのかえ？と問うてきた。まあ、あまりにも唐突な質問だったからな。

「ああ、エルフがわざわざ過酷な環境の砂漠に住む理由があるはずだと思っただね。いくら精霊の力を借りられるとはいえ、もっと楽に暮らせる土地があるはずだろう？」

俺の話聞いた海母は目をぱちくりと驚いた顔をした。おや、意外と考えているんだね、といった思考が感じ取れる。

なぜ直ぐに海母の考えが分かるかって？基本、海母は俺をからかってくるからな。馬鹿にする時の表情を何度も見れば嫌でも考えが分かるさ。

しかし、一転して海母の表情が変化する。少し目を細め、暫く何かを考えているような素振りを見せた。なんだ、聞いてはいけない内容だったのか？

何故か居たたまれない気分になった俺は、うつむきながら色々と想像を膨らませる。

「・・・確かにエルフにはサハラを離れられない理由があるよ。今は西に住まう悪魔が起こした大災害、それを二度と起きぬよう起こさぬよう、監視しているんじゃない。何処を監視しとるかはわからないがね」

海母の言葉に俺は思わず顔を上げる。見れば海母は遠い目で洞窟の天井を見上げている。うわ、これは地雷を踏んでしまったか？大災害と言うからには海母の家族も巻き込まれたのかもしれない。

これは・・・流石に気まずい。

「す、すまない海母。まさかそこまで悲惨な話だとはおもわ「ふあふあふあ、何を勘違いしているのかえ？」・・・は？」

「そもそも六千年も昔の話じゃて、それも祖母から聞いた話さね。わらわは別に悲しんでいるわけでもなく、その悪魔を恨んでいるわけでもないよ」

さいですか。まあ、気にしてないのならそれでいい。しかし六千年とはスケールがデカい。祖母から聞いたということは、海母も結構な歳　ギロリ　・・・つまり六千年前からエルフは砂漠に住み着いているということか。しかし一つ気になるな。

「なあ、悪魔っていったいどんな奴なんだ？」

今までで一番気になった単語、悪魔について興味を引かれつい聞いてしまった。しかし流石に話してくれないかもしれないな、なにせ大災害と呼ばれる事を起こした存在だ。

「なに、坊やもよく知っているよ」

「俺が知っている！？」

思わず大声で俺は聞き返してしまった。俺が知っている存在、今まで海母が話してくれた種族なのだろうか？

いや、海母は”俺がよく知っている”と言った。まさか地球で言う悪魔や悪鬼の類と同じなのだろうか、だがこの世界での悪魔や悪鬼を俺は知らないし、地球では架空の生物だ。

再び考え出した俺を見て、海母は一呼吸置いてその存在を語ってくれた。

「それはね、坊やと同じ人間だよ」

## 第二話 人と竜（後書き）

### 物語のヒント

#### 海外の適応力

その手の職業の方なら、海外を渡り歩くうちにいつの間にか身に付いているであろうスキル。

#### ヤックデカルチャー セントラーディ語。

関心や興奮を伴いつつ、とても信じられない事態に遭遇した時に使用する。

「なんと（言う）」「を意味する「ヤック」、「信じられない、恐ろしい」を意味する「デカルチャー」という二つの単語で構成されている。

#### 不変の魔法

原作でエルフのルクシャナが剣デルフリンガーにかけている精霊の力と同じ。通用するのは物質のみ、生物には効果が無い。

#### この二次創作における”魔法”

オリ主が、精霊の力と系統魔法の区別をするのが面倒なので、二つまとめて”魔法”と呼ぶことにした。

今後、独自解釈や別の力、オリジナルの派生などが出てくるため、呼び方全て”魔法”または”魔術”とする予定。

ホグワーツ

某有名小説の魔法学校。

行けるのなら一度は行ってみたい。

武器、兵器

”海母の巢”付近のそれらは、風化と”とある理由”により殆ど使用不能。

シャイターンの門は、武器・兵器として機能する物のみを召喚している設定です。とある理由は話が進行すれば出てきます。

使用可能な武器をオリ主に与えないでください、歓喜のあまり不審な行動を起こします。

海母の年齢

彼女の年齢は・・・おっと、誰か来たようだ。

悪魔、悪鬼

空想上の存在。もしくは宗教用語。

人の「煩惱」や「悪」、そして「病」を表す言葉でもある。

第三話 長耳の拳（前書き）

なぜだろう、ネタ回だと筆が進む。

### 第三話 長耳の拳

悪魔が人間というのは最初こそ驚いたものの、少し考えれば納得できる話だった。

とある物語で、”人の心が世を乱す。この世に悪がいるとすれば、それは人の心だ”というセリフを聞いたことがある。

・・・色々混ざってるようだが、そこは気にしない。

「どんな人間が大災害とやらを起こしたんだ？」

俺は更に突っ込んで聞いてみる。当然、メモを取りながら。

「人間の中でも特別な力を持ったメイジとその従者が起こしたそうじゃ。エルフはシャイターンと呼んで忌み嫌っておるよ。そして、今でもその力は世界を汚すと恐れておる」

41

世界を汚すとか、まるで核兵器や化学兵器のような表現だな。

しかし、悪魔と呼ばれる彼らにも大災害を起こすに至る理由があったのかも知れない。うん、まだまだ情報が足りないな・・・あれ？

「なあ海母。俺とこの世界の人間は本当に同じ種族なのか？」

そもそも俺の世界では、魔法なんて空想の産物として知られていくだけなのだが・・・

「ああ、坊やは異世界から来たんだったね。わらわが見たところ殆ど同じと言っていていいさね。違うのは魔法を使えるか否か、すなわち精霊達に命令できるかどうか、この一点だけじゃ」

「うーん、俺としては明らかに大きな違いに思えるのだが」

特別な力や能力があれば、今まで出来なかった夢のような事も実現が可能となるかもしれないのだから。

一部の人間には魔法や超能力ができる、しかし他の人間には絶対に”ソレ”を実現できない。はたしてそれは同じ人間と言えるのだろうか。

あんな力が使えたら、あの時あれだけ仕事で苦労することもなかっただろうに。こんな力が使えたら、たとえ圧倒的多数に追われたとしても、自分だけじゃなく他人も護ることができただろうに。いちいち乾いた海藻を集め、ライターで火を着けてから魚を料理する手間が省けるし・・・って、しまった！

「おやおや、真っ黒焦げじゃないか。今晚は食事抜きだね。ふあふあふあ」

海母の会話に夢中で調理中の魚を盛大に焦がしてしまった。辺りに嫌に目に染みる臭いが漂いだす。畜生、なけなしの魚が・・・しようがない、諦めてさっさと消火してしまおう。

「ふあふあふあ。嫉むでないぞ、坊やよ。特別な力を使えるなんぞ、種族にとって本来は微々たるものなのじゃ。どちらも人間であることに変わりないんじゃないよ」

笑いながらそう語る海母の言葉は、俺の感情を戒めるかのごとく心に深く刻まれていった。

第三話 長耳の拳

・・・海母から悪魔について聞いた夜から、さらにひと月近く時が流れた。

「さて、今日は探索に行きますか」

準備運動を終え、両手で掬った海水に”水中呼吸”、そして装備に”不変”の魔法をかけてもらうよう、海母にお願いする。

「おや、今日は鍛錬をしないのかえ？」

俺は海母の勧めで、漁や探索の他に、様々な鍛錬を行うようになっていた。内容は海母が考えたもので、回復以外は魔法に頼らず行う。

曰く、魔法に頼ってばかりでは己の力を底上げできないからとのこと、当然と言えば当然か。

鍛錬の成果は筋力の増加だけに留まらず、様々な部分が鍛えられた。

例えば、単に水中で息を止めるだけなら8分近く、何か動作をしながらの息止めは2分ジャストといったところだ。測った事が無いので断言は出来ないが、遠泳なら10キロ以上泳げそうだ。海母の、我が子を崖から落とすかのようなメニューをこなし続けた甲斐があ

ったというものだ。

人間、何度も追い込まれば短期間で成長するものだな・・・  
八八八（遠い目）。まあ、流石に野菜人のごとく急成長するのは無理だったが。

話が変わるが、探索を行う時は色々危険を伴うので、常に万全の状態を臨むようにしている。

以前、海母の忠告を無視し危険区域を探索に行った時、俺は海竜に襲われた。戦える装備も無く水中呼吸の魔法も切れかかっている状態だったため危うく死にかけてたからな。海母が助けに来なかったら、俺は海竜の餌になっていたところだ。

・・・話を戻そう。

そんな事があったからこそ、海母は俺に鍛錬を勧めたのだろう。もはや海母には感謝してもしきれない。

「ああ、今日は鍛錬は無しだ。後、漁もしないよ。以前の収穫物で保存食を作っておいたから」

海母は鍛錬を勧めることはあっても強制はしない。鍛錬を行おうとする意志もまた力となる、だそうだ。

「おや、後でその保存食とやらを頂こうかね」

「かまわないよ。だが味は保証できない」

そう俺が答えると、海母は少し苦笑した後魔法をかけてくれた。俺は掌の海水をぐくりと一気に飲みほし、ありがとうと礼を言う。最初は苦手だった魔法がけ海水の一気に飲みも随分と慣れたものだ。

以前の探索で見つけた水中銃・APSアサルトライフルやククリナイフ　異世界に来た際、俺に巻き付いていた鋼線に付いていたを装備し準備を整え、それじゃあ行つてくると海母に告げた。

「何度も言うが、蛸岩から先は海竜の巢ぞ、決して越えてはならぬ。鍛錬により少しはマシにはなったが、万全の装備だったとしても坊やの力では一匹の海竜を追い払うことで精いっぱいじゃろうて。」

「わかつてる。同じ轍は踏まないさ」

そう言いながら、俺は洞窟にある井戸のような穴へ向かい、その海面から顔を出しているイルカに近づく。

「今日もよろしく頼む」

このイルカは海母の友達らしく、自らの背に俺を乗せこの先にある海中トンネルを進む手伝いをしてくれるのだ。挨拶のついでにイルカの頭を撫でると気持良さそうにキューンと鳴いてくれる。

ちなみにこの洞窟の出入り口、最初は”ここ”一つだけと想像していたのだが、外に出る道は他にもあるようだ。

たとえば洞窟の壁を登った先にある抜け穴。これは外の断崖絶壁に通じている。何とか壁を登ることは出来ても、外の断崖絶壁を降りる術は流石に無いため、目下、保存食の日干し場所として利用している。

他には海母の寝床からさらに奥にある海水で満たされた穴がある。だが俺は行った事が無い、というより海母が通してくれない。先には何かあるのかと尋ねたら、こう返答された。

「禁則事項じゃ」

何処かで聞いた事のあるセリフをウインク付きで言われた。・・・  
もしかしたら海母は電波を受信する力もあるのかもしれない。まあ、  
考え過ぎか。

## 閑話休題

さて行こうかと、勢いよく地面を蹴る。最高にハイなテンション  
のまま、空中で一回転しつつ飛び込み姿勢を整え着水時の抵抗に備  
える。

なにしろ今回の探索は実に15日ぶりなのだ。俺の期待が高まり、  
自然と過剰動作になるのはしょうがない事だ。  
オーバーリアクション  
フクテカ

ざぶん！ゴポゴポ・・・  
ビリリッ！！

「・・・あれ？」

着水音はともかく、なんだこの布を引き裂いたよな音は。思わず  
自分の下着パンツを見るが特に問題は無い。

そもそも、引き裂き音源は俺の前方から聞こえていたようだった。  
しかも指先に何か奇妙な抵抗を感じる。ふと目の前に視線を向ける  
と・・・

「  
% x # \$ ! ! ? ？」

服が破け上半身が露わとなり、俺から離れつつ百面相のごとく顔を変えている長耳短髪娘がいた。

エキゾチックだったであろう衣服は見るも無残な姿となり、短髪娘の胸元の膨らみとか桃色の先端とか、とにかく全てを官能的に演出していた。

ふむ、異種族の裸も悪くない……って、俺は何をジロジロ見ているんだ!?

急ぎ脳内のエロティカセブンを駆逐し、彼女（の裸）から目をそらそうとしたその時、俺の耳にヒステリックな声が響いてきた。

「あなた、いきなり何するの!……って蛮人!?なんでここに蛮人がいるのよ!」

恐らく短髪娘の連れであろう、彼女を庇いつつ怒りを露わにする長耳長髪娘がいた。ふと自分の手元を見れば、指先に（恐らく）短髪娘の下着だったであろう布生地が絡まっている。

……つまり俺はダイナミック飛び込み着水した際に、海面へ出ようとしていた短髪娘の服を破き、その一番奥にあった下着すら破き盗った後、肌蹴た部分を凝視していたと……完全に痴漢暴行です、本当にありがとうございます。

ハハハ、ナンテコツタイ。これは圧倒的に俺が悪い、もはや前方不注意云々の問題じゃない。犯罪者扱いされては堪らないと、即座に頭を下げあやまろうとする。

「す、すまない。まさか俺以外に誰か居ると思わ　　ごふう!」

完全な不意打ちだった。頭を下げた俺が謝罪と言いつの言葉を終

える前に、脇腹の辺りに強烈な衝撃を受けたのだ。肝臓レバーを抉られる  
激しい痛みを耐え、なんとか目を向ける。それを放ったのは長髪娘  
で、今まさに殴りましたといった姿勢フォームだった。

しかしここで疑問が浮かぶ、なぜなら彼女の拳は俺に届いていな  
いのだから。

「ま、待て！話を　お、ふう！？」

問答無用で追撃される。俺に一撃を与えたのは、彼女の周囲に漂  
っているまるで水の弾のような多数の物体、そしてそれは拳の動き  
と完全リンクしていた。

海中なのに水の弾とは奇妙な表現だが・・・この女は”それ”を  
ジャック・デンプシーよろしく全て撃ち放ってきた。

「わたしの！「がはあっ！？」幼馴染に！！「げふう！！？」何し  
てるのよ！！」「あばばばばば！！！！？」っ　「

やめて！ヨシアキのライフはもうゼロよ！と止めてくる者など居  
るはずもない。

俺を背に乗せようと待機してくれていたイルカにいたっては、他  
のイルカ　恐らく彼女達が乗って来たのだらう　と楽しく戯れ  
る始末。

もはや俺は激流に身をゆだねるままフルボッコとなるしかなかっ  
た。

「　この、蛮人がああああ！！！！」

「うばああああ！！！！」

最後の一撃、顎を抉るジェット（水流）アッパーで俺は海中から

一気に空高く放り出される。

KO！勝者、長髪娘！！1ラウンド、開口一番で炸裂したデンプシーロールとトドメの大振りアッパーにより、犯罪者を見事撃退したあ！！！！

嗚呼、実況されてたら”こんな感じ”だろうな。無駄に無駄の無い無駄な妄想をしながら、俺は地面に激突する。

段々と薄れゆく視界に、突如として海母の顔が現れた。俺の顔を覗き込むやいなや、にやりと海母が笑う。

「おやおや、随分と早いお帰りだね」

俺は何時も助けしてくれる海母に感謝している。だが尊敬はしていない。

「・・・はやく・・・回復してくれ・・・」

そこで俺は意識を完全に手放した。

### 第三話 長耳の拳（後書き）

#### 物語のヒント

#### 野菜人

戦闘民族。瀕死の状態から脱する度、能力が上昇する。  
極稀に、怒りで髪が金色に輝く者もいる。

くり んのことがー！

#### 保存食

海産物の干物。なけなしの知識で作っているため、どんな味になっているか未知数。

#### APSアサルトライフル

旧ソ連が開発した水中銃。日没または薄暗い水中での使用を目的に制作された。地上でも一応は使用可能だが、銃の消耗が激しく連続使用は不可能。旧ソ連の武器って、無茶な物が多いと思う。

もつとも”不変”の魔法で銃の消耗が無きに等しいため、オリ主は探索時のお供として愛用している。

#### 最高にハイ（ry

オリ主は人間なので、頭に指を突っ込んで脳みそグリグリなんてしない。

エロティカセブン

オリ主の脳内には性欲を司る七人の小人がいる。  
内容はR指定につき、記すことも憚られる。

ジャック・デンプシー

本名ウィリアム・ハリソン・デンプシー

驚異的な剛腕を誇る、アメリカ合衆国のボクシング世界ヘビー級王者。

あわれオリ主はトレドの悲劇を体感することとなった。

うぼあああああ

某皇帝の断末魔。

この場合は童帝の断末魔。

ジェットアッパー、デンプシーロール、大振りアッパー  
ボクシングのフィクション作品に登場する技の数々。  
こんなので攻められたらフルボッコで済まないだろう。

## 第四話 エルフとの出会い（前書き）

原作キャラが崩壊しています。特に性格が。

## 第四話 エルフとの出会い

「ふー、はー、ふー、はー」

わたしは急激な運動と力の行使の所為で息が切れていた、ついでに頭もキれていた。わたしの大切な幼馴染が蛮人に”あんなこと”されたのよ。ついカツとなって、叔父さまから禁じられていた”あの技”を使ってしまった。

反省はしているわ、後悔は微塵も無いけどね。

「あの、ルクシャナ・・・わたし、大丈夫だから・・・ね？」

この娘はいつもそう。自身に嫌な事があるうが悲しい事があるうが、絶対に自分より他を優先するわ。

今だって蛮人に粗相をされて色々と表情を変化させたけど、きつとこの娘は怒ってなんかいない。だって彼女はわたしと蛮人の両方を心配しているのだから。

「アルティナ！あなたはもっともつと怒るべきよ！」

「でも、あの人も悪気があったわけではない・・・と、思うの。だから・・・ね？」

そう言っつて、アルティナはわたしの拳に手を添える。優しい笑顔に引つ張られ、蛮人に追撃をしようと籠めていた精霊の力がわたしの苛立ちと共に抜けていく。

ふと蛮人の方を見やると、そこには意外な光景があった。それを見た時点で、あの蛮人に対するわたしの敵意は完全に消え失せた。

「わかったわ。あなたと海母に免じて、これ以上あの蛮人を攻撃するのは止める」

まさか海母が蛮人を庇う様な姿勢で苦手な治療を行っているなんてね。正直、驚いたわ。そんなわたし達の様子を見ていた海母は、蛮人の治療をしながら話しかけてきた。

「よく来たね、わらわの娘達。それにしても、このはねつかえり娘は随分とまあ手荒くやったものじゃ」

「今回は叔父さまの本をちょっと失敬ただけよ！ね、アルティナ？」

「・・・違うこと・・・じゃないかな」

それくらいわかっているわよ、アルティナ。ただ、ここまで海母がこの蛮人に気を使うのが気に食わなかったから、ちょっと話の内容を無視しただけよ。

大体、なんでここに蛮人が居るのよ！

その事をわたしが海母に問いただそうとしたが、既にアルティナが控えめに手を上げながら質問をしていた。

「あ・・・この人はどうしてここに？」

「ふむ。その前に娘達よ、坊やの治療を手伝っておくれ。海竜の時とは訳が違う、わらわだけでは瀕死状態を癒す事は出来ぬ・・・坊やの話は治療をしながら聞かせようじゃないか」

そう言いながら海母は、此方に来なさいと、首を振りわたし達に催促してきた。

第四話 エルフとの出会い

「・・・っ！んん!？」

俺はずいぶんと重い瞼を開けた。痛む全身を無視して無理やり体を起こしつつ腕時計で時刻を確認する。どうやら随分と眠っていたようだ。眠る前の記憶があやふやだったため、現状を確認するために周囲を見渡し、愕然とする。

そこには黙々と日干し海産物を貪り食う海母と、楽しそうに俺の所持品を漁る女性二人の姿があつたのだ。・・・なんでせうか、この亜空間は。とりあえず、お嬢ちゃん達を止めよう。

「お嬢ちゃん達、なぜ俺の荷物を漁っている？」

しかし、俺の言葉に答えてくれたのは海母だった。それもむしやむしやと海産物を食べながらだ、行儀悪いぞ。

「むぐ、よつやく目が覚めたかえ坊や、ごくん。ああ、保存食は頂いてるよ。味は保証できんと言っておったが、これはこれで中々に美味じゃぞ」

まったく会話が噛み合っていない。それに、俺が話しかけた相手はそちらのお嬢ちゃん達なのだが、こちらの声が届いていないようだ。完全に俺の所持品に夢中といった状態だな、あれは。

なあ、お嬢ちゃん方、人の物を無暗に触るなど親から教わらなかつたかい？

・・・ん？海母が美味しいと言った・・・だと！？

「海母の御墨付きを貰えるとは嬉しいね。作った甲斐があったよ」

こう見えて海母は相当な食通である。彼女の食事は、不味い魚は丸呑みにし、うまい魚や海藻はよく噛んで味を楽しむのだ。

その舌は人間の味覚とほぼ同じで、俺の世界だったら良い料理の評論家になれるくらいだと思っている。実際、海母が教えてくれた魚 鯛のような魚だった はとても美味だった。

ここで俺は、海母はどうやって断崖絶壁の日干し場所から保存食を持ってきたんだ？と少し考えたが、すぐに理解した。あのお嬢ちゃん達が行ったに違いない。その証拠に、彼女達の居る所にも（海母の所より多く）保存食が置いてある。

「一応、坊やの分も少し残してあるぞえ。流石に全て無くなるのは可哀想かと思うての」

「少し、じゃなく多く残してくれよ・・・ああ、もう遅いか」

もはや後の祭りである。探索する日を増やしたいがために作っておいた保存食だったのだが、またしばらく漁を行う必要があるな。ちくせつ、この大喰らいめ。

「 つ！！！？ 」

突如、視界に驚愕の光景が飛び込んでくる。長髪の女性が俺のノートパソコンを弄くりだしたのだ、それもかなり無茶苦茶に。

いくら不変の魔法がかけられていても壊れる時もある、と海母から聞いていた俺は、即座に大声で注意を促す。

「そこの長耳長髪女！そんな乱暴に”ソレ”を扱わないでくれ。その方向に折ったら壊れるから！隣のお嬢ちゃんみたいに丁寧に扱ってくれ、頼むっ！」

今まで寝ていた（と彼女は思っていたであろう）俺の鬼気迫る怒鳴り声に驚いたのか、彼女はビクンと体を震わせた後、こちらを振り向き睨んできた。しかし隣の短髪お嬢ちゃんに諭されるやいなや、先ほどとは違って慎重にノートパソコンを弄りだした。なんでわたしが蛮人の言う事を聞かなきゃいけないのよ、などとブツブツ呟きながら。

そうそう、ベネ、完璧だ。・・・彼女の最後の呟きはともかく。

「・・・で、お嬢ちゃん達は何者だ？」

一連の対応に満足した俺は彼女達に問いかけた。今ならこちらの声も聞こえるだろう。

「わたし達はエルフよ。・・・わたし達に尋ねる前に、蛮人のあなたが名乗るのが普通じゃないかしら？」

向こうはあからさまに不機嫌な態度で返答してきた。うむ、前言撤回、彼女の対応に俺は毛ほども満足していない。

確かに先程は怒鳴ってしまったし、今、名乗らなかったのはこちらのミスだが・・・言うに事欠いて蛮人とは。が、ここは感情を抑

えよう。相手は13〜15歳の小娘、ならば年上の俺が大人の対応を見せてやらねば色々とししがつかない。

あ、そもそも示しをつける存在なんて無いよな。悲しいけど、ここ異世界なのよね。

「すまなかった。俺の氏名は織田義昭。信じられないかもしれないが、別の世界からこの世界に飛ばされてきた。今は洞窟（こほら）で暮らしていて、海母の世話になっている」

俺がそう話すと、彼女は目をぱちくりさせ、意外な物を見るような目を向けてきた。吊り上った切れ長の瞳がとても印象的だ。

「・・・へえ。海母の話は本当だったのね。あ、わたしはルクシヤナ。よろしくね」

寝ている間に海母が俺の事情を話していたのだろうか。しかし先程の不機嫌はどこに行ったのか、随分と喜怒哀楽の激しいお嬢ちゃんだな。雰囲気ガラリと変わったじゃないか。

「はじめ・・・まして。わたしは、アルティナ・・・といいます。・・・エルフです」

対して隣のお嬢ちゃん（お嬢ちゃん）は気弱なのか、おずおずと頭を下げつつ途切れ途切れの言葉で自己紹介をしてくれた。少し垂れたキツネ目で、薄ら開いた瞼の奥に翠玉の様な瞳が輝いている。

しかし、彼女達がエルフ・・・か。耳が長いだけで人間と変わらないように見えるが、彼女達から見た俺はどうなのだろうな。海母の話では人間とエルフの関係は最悪だったはずだが。

考え始める俺に、アルティナは頭を下げてまま話しかけてきた。

「あの・・・こちらこそ、すみませんでした。まさかルクシヤナが貴方に対して”アレ”を放つなんて・・・」

ん？”アレ”って何さ？思わず俺は顎に手を当て首を傾げる。

「しょ、しょうがないじゃない！だって、幼馴染のあなたがあんな目にあつたのよ！？精霊の力で”百裂拳”を放ちたくなるのも当然だわ！」

話から察するに、アルティナが”あんな事”をされてプツンしたルクシヤナが、俺に対して”アレ”こと”百裂拳”という技、いや魔法を放つたと。

つまり俺がアルティナに”あんな事”をしたわけだ・・・いかん、全然覚えていない。

「あの、すまない。お嬢ちゃん達の言っている”あんな事”から”百裂拳”に至るまで、全く覚えていないのだが・・・」

正直、言ってから後悔した。俺が覚えていないのだから、話を合わせて適当に頭を下げればよかったのだ。そうすればこの話はここで終わったはずだ。完全に藪蛇やぶへびである。

「」「覚えてない(の)(じゃと)!!?」「」

ホイキターーーーーー。ほら見る、果たして藪から出てくるのは

無害な蛇か毒蛇か。

「アルティナの操を奪ったたけじゃなく、その時の事を覚えていないなんて！」

「あれは・・・事故。・・・そう事故だったの。・・・あと、その言い方は誤解を招く、止めて」

「よもや、記憶が飛んでおるじゃと！？なんと不運な助兵衛じゃ！」

「有り得る話。」百裂拳”を受けて・・・辛うじて無事だったのは叔父さまと・・・たぶん、アリーぐらい」

「ちよつと、ここでその話はやめてよ、アルティナ！」

何故かはわからないが海母まで食いついてきた。話の内容から俺が引きずり出したのは毒蛇とわかる。

しかも、ガールズトークから所々で不穏な単語が聞こえてくる始末。

うおおおお、俺は一体何をしたんだ、されたんだ！？

思わず頭を抱え座り込んでしまう。その拳動を見た二人と一匹は、俺にさらなる憐みの視線を向けてきた。

「のう、坊やよ。何も気にすることはない。そう、初めから何もなかったのじゃ」

海母、白く輝く目が霞みだしているぞ。なんか、その、心配かけて悪かった。

「本当に・・・ごめんなさい」

アルティナ、君は謝るべきじゃない。そんなに耳が垂れるほど落

ち込むな。君はむしろ被害者なのだろう？俺が何をしでかしたのかわからないが、謝るべきはこちらだと思う。

「ま、まあ、蛮人が”百裂拳”に耐えられるはずないわよね。あやまるわ、ごめんなさい」

そしてルクシャナ、お前はもう少し反省と自重をしろ。話の流れからして真っ先に謝るべきはルクシャナだろうに。あと、いくら温厚な人間でも、そう何度も蛮人と呼ばれば流石にキレルぞ？

まあ兎に角、これ以上、騒ぎを大きくされてはこちらも堪らない。色々あったようだが俺は生きているのだから、それでいいじゃないか。

・・・決してアルティナにした事の内容から逃げているわけではないぞ。

「見ての通り五体満足で生きている。だからそんなに気にかける必要は無いさ」

出来る限りの笑みで語りかける。・・・二人とも、なんでそんなに怖がっているんだ？

「うむ、そうじゃの。少し記憶が抜けてしまったとはいえ、よくぞあの状態からここまで持ち直したものじゃ」

「え！？」

## 第四話 エルフとの出会い（後書き）

物語のヒント

ルクシャナ

原作登場人物。

原作の描写では、補助系の精霊の力しか行使していなかったと思いますが、この作品では攻撃系 特に水の精霊 の力を行使してきます。

性格も少し（？）変わっています。

その辺の話は次回。

アルティナ

オリキヤラー人目。

ルクシャナの幼馴染。 イース6のイーシャのような容姿です。

ルクシャナの叔父さま

アルティナの養父。

この作品では中盤以降に登場予定。

百裂拳、第三の被害者。 ルクシャナにその封印指定を命じる。

治癒

水の精霊にお願いして肉体を修復する。

海母は攻撃と防御に特化している分、治癒は苦手という設定。

そもそも海母は、原作では能力未知数なので、本作品ではご都合主

義によりこうなりました。  
今まで苦手ながらも鍛錬で傷ついたオリ主を治療してくれていま  
した。

#### 食通

たまに、うーまーいーぞー、と叫んで口から光線を出す。  
海母の場合、氷のプレスを吐くため注意が必要。

#### オリ主の所持品（荷物）

エルフ達は主にアタツシユケースの中を漁っていた。  
ノートパソコン、説明資料、携帯電話と充電器、日用品、海外出張  
のお供など、色々な物が入っていた。オリ主、お供を見られなくて  
よかったですね。  
ちなみに、漁ることを進めたのは海母だったりする。曰く、口で説  
明するより見た方が早いじゃろ？とのこと。

#### 翠玉すいぎょく

#### エメラルドの和名

#### 百裂拳

世紀末よりオラオラの方がイメージしやすい。  
アルティナが考案した体術で、ルクシャナが精霊の力を利用した魔  
法に昇華、強化した。  
驚異的な威力を誇るが、欠点として十分な水分（水の精霊）を確保  
できなければ使用できないことと消耗の激しさが挙げられる。  
後に、その威力を体感した彼女の叔父により封印指定を受ける。

今までの被害者はオリ主含め四名。

不運な助兵衛

ラッキースケベの反対語と思われる。

アリイ

原作登場人物。

ルクシャナの婚約者であり、ルクシャナとアルティナの幼馴染。

きつと将来、嫁の尻にしかれ振り回されるであろうイケメン君。

百列拳、最初の被害者でもある。本作中でアルティナが”辛うじて

無事・・・たぶん”と言っていたが、実際は重傷を負っている。南無。

第五話 俺の名前を言ってみろ（前書き）

オリ主、ルクシャナ暴走回。これは彼らの仕様ゆえ、御寛仁を。

いつの間にか総ユニークが1000を超えていました。ありがとうございます。

## 第五話 俺の名前を言ってみる

まだ幼少の頃、わたしは叔父さまに連れられてきたアルティナと出会った。

「この娘はわたしの知人の子供だ。彼が諸事情で育てることが出来なくなったため、こうして連れて来たのだよ。ルクシャナ、この娘と仲良くできるね？」

「うん！わたしルクシャナ。あなたのなまえをおしえて？」

「・・・アルティナ・・・です」

「よしよし、いい子達だ」

叔父さまはそう言って、わたし達の頭を優しく撫でてくれたことを今でも覚えていね。

でも一緒に暮らす内に、わたしはアルティナを他とは違うと感じ始めたの。賢いのよ、それも大人のエルフ以上に。

最初わたしは妹のように彼女と接していたけど、次第に幼馴染の友人といった具合に一線を引いて接するようになったわ。当の本人もその方が気楽だったみたい。

当時から他のエルフと違う思考や思想を抱き、周囲を驚かせ、わたしが蛮人を研究する学者になるきっかけを作った不思議な娘、大切な幼馴染。アルティナのことをもう一人の幼馴染　わたしの婚約者　は気味悪がっていたけどね。

でもそのアルティナのおかげで、わたしは”ともだち”こと海母と出会う事が出来たのよね。

あ、海母って名前はわたし達が名付けたの。最初はわたし達を長耳娘って呼んでいたけど、何度か訪れる内に”わらわの娘”って呼んでくれたのよ。だからわたし達も二人で考えた名前で呼ぶことにしたの”海母”ってね。

） 第五話 俺の名前を言ってみろ ）

「わたしは蛮人の事、とおーーーーーっても興味があるの！さっきも言ったけど、わたしこれでも蛮人を研究してる学者なのよ」

「・・・何度も聞いたよ」

先の負傷により漁ができなくなった俺は、現在、同居中のエルフ二人と韻竜一匹に養われている。最初は、このくらいの体の痛みなど平気だと漁に出かけていた。しかし、どうやら俺の体は相当弱っていたようだ。

漁を初めて二日目、イルカで海中トンネル移動中に普段なら避けられるはずの岩へ右目をぶつけ負傷、さらに別の岩に頭を強打してしまい気絶してしまったのだ。

その後、二人に救助されたのだが、治療の際に体が治りきっていないことがバレてしまい、海母より俺に外出禁止令が下されたのだ。

今日の留守番兼治療担当はルクシャナのようだ。アルティナと海

母の姿が見えない、漁にでも行ったのだろうか。

・・・しかし毎日のように治癒魔法をしてもらい、さらに食糧を取って来てもらう様は完全にヒモである。我が事ながら情けなし。

「ねえねえ。今度は異世界の、蛮人の農業の話が聞きたいわ！」

正直、俺はルクシャナが苦手だ。

こんな状態にした元凶だからと言う訳ではない、俺を治療をしている時、必ずと言っていいほど人間の事を聞いてくるからだ。しかも一方的に自分達の話語り、わたし達のことを話したんだから蛮人も（人間の）話をしなさい、と言ってくる始末。

そりゃ、有意義なエルフの情報を話してくれるなら、俺も話す気分にはなると思うのだが、如何せん、ただの世間話や彼女の思い出話がほとんどだ。

「・・・蛮人じゃなくて人間と呼んでくれ」

エルフ達は人間のことを総じて蛮人と呼んでいるそうだ。もっとも、蛮人と呼ばないエルフも中には居る、アルティナのように。

「これは癖のようなものね。物心つく前から周りのみんなが蛮人つてよんでいたのよ？すぐに呼び方を変えるのは難しいわ。それに、この世界の蛮人は蛮人と呼ぶに足る事をしているのよ」

「ならせめて俺のことは名前で呼んでくれ」

どうせ有意義な情報が得られないなら、せめて楽しく会話したい。このまま、話す度に蛮人と言われてはストレスが溜まる、徐々にだが確実に。

来日した他国の方々が”ガイジン”といわれて気分を害する理由

がよく解った気がする。

「ええと、ヨシユアキだっけ？ 蛮人の名前は覚えにくいし呼び辛いわ」

どうやら日本人の名前はエルフにとって覚え辛いらしい。ついでに発音もし辛いようだ。

ルクシャナが織田義昭をオデ・ヨシユアーキなどと発音した時は、あまりにも不意打ちで俺は飲み込もうとしていた食べ物を喉に詰まらせたっけな。

「あなたのこと、あだ名で”ヨシユア”って呼ぶのが何で駄目なのよ？これならわたしも発音し易いのに」

「それは・・・」

俺が俺じゃなくなる気がする、その言葉が出せず声が詰まる。

ここの生活は楽しい、心が落ち着くのだ。地球の社会では決して体験出来ないだろう。だからこそ恐ろしい、地球に戻る意志が砕けそうになることが。

・・・俺は絶対に地球に戻る、帰還しなければならぬ。

もつともルクシャナが来てからというもの、俺の心は癒されては壊される事が日常と成りつつある。いや、むしろ破壊される率が高い。

しかし、そのお陰で意志が保てているのかも知れない、微妙な気分だ。

## 閑話休題

「案外、俺は（心が）揺れているのだろうな」

「何それ？訳が分からないわ。兎に角、わたしは色々な話が聞きたいの。これでも、あなたが他の蛮人と違うことは認めているのよ」

そこでルクシャナは言葉を止め、呪文を唱えだす。どうやら四肢の治療を終え、右目の傷を治療し始めるようだ。顔に刃物で切られたような傷が残り、右目の視力も殆ど無い。無茶した結果がこれである、我が事ながら（ry）

「ほらヨシユア、右目を見せて。あと、治療している間にヨシユアの世界の話聞かせてもらおうわよ」

・・・この女、まさか強硬手段にでるつもりか！？確かにルクシヤナは蛮人とは言っていない、しかし俺は確かにその名で呼ぶなど言っただぞ。

「お、おい！俺の名ま「悪いけど早く右目を見せてね。治療できないわ」・・・はい」

治療を盾に、先手を打たれてしまったか。

こうなったルクシヤナはまず間違いなくこちらの話を聞かない。この手のやり取りで、現に俺の所持品の三割は彼女に奪われてしまっている。正に我が道ゴイイシクマイウエイを行くといった性格なのだ。さらに行動が読めないため、とても夕チが悪い。きっと彼女の叔父や婚約者は随分と苦労している事だろう。

しかし今になって考えれば、他人に自らの呼び方を強要するとい

うのはかなり我儘だったのかもな。こうなれば腹をくくって覚悟をきめるしかないか。

「じーーーーーっ」

ってかルクシャナよ、いい年した女の子が鼻息荒げ血走った目で男の顔に近づく様は、非常に痛々しいぞ？俺まで痛い男になってしまいそうだ。もうなってるって？ハハハ、ご冗談を。

「わかった、わかったよルクシャナ。俺の世界の話をするから、そんなに鬼気迫る顔で近づかないでくれ」

「ふふっ。治療を始めてから約ひと月、ようやく折れてくれたわね。さあ、右目の治療を始めるわよ。ヨシユアも異世界の事を話さない」

と勝手に満足といった表情に変わった彼女は、さーて今日のヨシユアはどんな事を話してくれるのかな。といった具合に鼻歌交じりに治療を始めた。俺は自分の心を折られなくなかったよ、と言いたい。ここは我慢する。

・・・こうして見れば非常に容姿が整っており笑顔も素敵なのが、如何せん残念美人という言葉が俺の頭から離れてくれない。

「なんか、そこはかとなく馬鹿にされた気がするわ」

「いや、まさか」

いかにいかに。海母も含め、彼女達は非常に勘が鋭い。また不機嫌になる前にさっさと地球の話をしてしまおう。さあ、情報交換じょうほうこうかんの

時間だ。

「さて、私の世界の農業についてでしたね。まず農業の基本として

」

こうして騒がしくも穏やかな昼のひと時は過ぎて行った。

### 数刻後

「ふーん。農業の効率と生産力が上昇した弊害もあるのね」

「ええ、正直に言って私の国は農業政策を誤ったかと」

「しっかりと保障と利益確保手段を整えてから対応したほうが良いと思うのよ。それじゃあこちらの世界と同じだわ」

「ははは、異世界にも色々<sup>し</sup>と国々には柵<sup>しが</sup>があるようですね」

驚いたな、流石は人間を研究している学者だ。話の理解力が早い。・・・私の会社にもこういうった物事の理解力が高い人材が欲しいものだ。

さて、そろそろ仕事の時間は終わりか。

「さて、今日の治療も終わり！少し痕が残ったけど、右目付近の傷

はほぼ完治したわ。でも、視力の方はどうかしら？」

そう、それが一番の問題だ。残念ながら、魔法という奇跡の如き力であっても治せないようだ。俺の右視界は、かなりぼやけたルクシヤナの姿を映していた。

「視力は治っていないが、全く見えないわけでもない。ありがとうルクシヤナ、おかげで随分と良くなった」

俺はルクシヤナに精いっぱい感謝の気持ちを込めて笑いながら礼を言った。そう、失明したわけではないのだから。

日本では事故で失った視力が0.2から1.0まで回復した例もあるくらいだ、奇跡的ではあるがまだ希望はある。

「ちよつ……。何よ急に、気持ち悪いわね。あと、ヨシユアの笑顔ってね、笑顔じゃないのよ。なんか、こう、根源的な恐怖を孕んでいるのよ」

ぐふつ、出来ればオブラートに包んで言っただけで欲しい。結構、気にしているんだぞ。

この直球な性格が彼女の強みであり魅力なのだろうが、いつか取り返しのつかないことを仕出かしそうで不安だ。って、いかに、妹を見ているような感じだ。おかげで歳より臭い思考になってきたぞ。

「ふう、ただい「おかえり！アルティナ！」……。って、何？」

俺の心の支えである女神アルティナの降臨に、思わず俺は歓喜のあまり涙目になりながら彼女の方へ向かう。ゆっくりと這いよる様に近づくとその様は紛うこと無き変態である。

しかし俺が周囲の評価を落とすような愚行に及ぶのには大きな訳がある。なぜならばっ！彼女は俺の名前を正確に言える唯一にして絶対の存在なのだ！

アルティナの下へたどり着いた俺は、ガシリと彼女の肩を掴み、とても真面目な表情で話しかけた。

「俺の名前を言ってみろ」

彼女が若干引いているのはよくわかる。誰だってこんな謎テンションの男に近寄られたくはない。

しかし、いつもこちらの心情を理解してくれている彼女は、一転して満面の笑みとなりこう言い放った。

「ただいま・・・お、織田義昭さん」

FUUUUUUUUUUUU！ああ、心が安らぐ。短い会話でこのブラシーボ効果、ちゃんとした名前と呼ばれることがこれほど嬉しいものだ。ルクシヤナとは違うのだよ、ルクシヤナとは。

彼女が若干噛んでいるのは仕様ゆえ仕方がない。否、噛んでいるからこそ心に安息が訪れるのだ。これがオタク友達の言っていた”萌え”と呼ばれるものなのか！？

「あ、おかえりアルティナ。そうそう」

しかし、俺の安息は直ぐに終焉を迎える。現状において最も行動の読めない女によって。

「その変態だけど、これからヨシユアって呼ぶことに決定したから。あなたもそう呼んでね」

「ル、ルクシャナ！？俺の心の拠り所を奪う気か！」

俺は焦る気持ちにまかせるまま彼女の方を振り向き、そして見てしまったのだ。にやにやと口元を歪め目の奥には悪戯心それでいて侮蔑と呆れを含んだ、小悪魔のような微笑を。

「わたしヨシユアの事、ちょーっーと見誤っていたわ。あなたが異世界の話をする時はとても紳士的だったのに、まさかアルティナの前ではそんな野生動物の如き性格に豹変するとは・・・ね？」

そういえばルクシャナが、俺とアルティナの一連のやり取りを見るのは、これが初めてだったっけ。そりゃあ、大切な幼馴染が変態とこんな会話をしてたら・・・怒りますよね、普通。

ついでに、彼女は俺の焦る様を絶対に楽しんでいる。まさかこいつSか！？

「これは決定事項です。そうでしょうか？海母」

「ふむ、そうじゃのう」

漁からちょうど戻ってきた海母の確言を得たルクシャナは、得意げにふふんと鼻を鳴らす。しかし海母よ、タイミングが良すぎやしないかい？

「は、ははは・・・」

愚直に行動した結果、俺のこの世界での呼び名は”ヨシユア”と相成ってしまった。俺の阿呆・・・

## 第五話 俺の名前を言ってみる（後書き）

### 物語のヒント

#### 蛮人の文化

聞き出せる者ならば、ありとあらゆる事をルクシャナは聞き出そうとします。

生活習慣、建物の構造、日用品、農業、工業、商業、軍事、体術、剣術、銃技、そして魔術。

#### イルカ

たまに乱暴な動作をする。本人に自覚は無いためヨシユアは自分が傷を負ったことを咎められない御様子。もっとも、責める気はないのかもしれない。

#### 留守番兼治療

外敵に襲われる心配は無いが万が一ヨシユアに何かあった場合を考え、海母が提案した。治療、漁、自由行動の三つを一日毎にローテーションションしている。

#### オデ・ヨシユアーキ

ハルケギニア人は寄せ鍋をヨシユナベと発音していることから”さ行”の発音が上手く出来ない、何故か名前に音引きを入れたがる、以上の点からこうなった。

完全な独自解釈であり、反省も後悔もしていない。

ヨシユア

オリ主のこの世界での名前。よかったですね。

ゴイングマイウェイ

紙袋闇医者ファ ストの技では無い。

農業

ホント、この国の一次産業と二次産業はどうなることやら。

なぜならばっ！

イナズマキックを放つヒューマノイドがよく言います。

「俺の名前を言ってみる」

貴様の名前は織田義昭ではない！オデ・ヨシユ  
!?

あべし

治療を始めてから約ひと月

つまりヨシユアはそれだけの期間、彼女達のヒモとなっていた。  
爆発しろ。

オアシス

誰しも必ず一つは持っておかないと、世間の荒波に潰される、多分。

地面を液状化したりはしない。

S サド

サディズムの略。加虐性欲とも言う。

相手に身体的または精神的に苦痛を与えることによつて性的快感を味わう、またはそのような行為を想像したりして性的興奮を得る性的嗜好者のこと。

特に症状が深刻な場合、ドSとも言われる。

やり過ぎると変態どころか犯罪になります。要注意。

## 第六話 異端者として（前書き）

オリキャラのルクシャナがメインです。ちょっと暴走しますが、  
本オリ主が悪いんです。基

## 第六話 異端者として

うむむむ、と隣で何かを考え、頭を悩ませている人。いつもコロコロと表情が変わる彼は、異世界から来た織田義昭さん。わたしがこの世界で初めて出会った異世界の人間。

最初の出会いは色々と驚愕に満ちたものだった。

まず、いきなり服を破かれ、そしてジロジロと色々な部分を見られてしまった。出会いとしては最悪の部類だと思う。そ、その・・・男の人に初めて・・・見られ・・・ゴニョゴニョ。

きっとその時のわたしはいつもと違って色々表情を変えていたと思う。彼やルクシヤナはわたしが破廉恥な事をされて混乱していると思っただかも。

でもその時、正直わたしは自分の目を疑っていたの。服を破られたことじゃなくて、彼がわたしのよく知っている人種と余りに似ていたから。

黒髪に黒い瞳、典型的な胴長短足の体、どこかの武将のような威圧感を感じる敵めしい顔つき、そして身に付けた特異な武器と下着<sup>トランクス</sup>。

・・・  
間違いなく東方の人間、もしかしたら”あの国”の人かもしれない。そんな期待がわたしの中でどんどん膨らんでいったの。

・・・気が付いたら、ルクシヤナが全力全壊自重無しの”百裂拳<sup>チェント・アックア</sup>”で彼を海中から宙高く吹き飛ばしていたけど。

瀕死の彼をみんなで治療している時に、海母はわたし達に彼の事情を話してくれた。その話でわたしはさらに心を躍らせたの。まさか本当に彼はあの国の人間かもしれないと。

ようやく治療が終わったところで、ルクシヤナが海母に証拠を見せてほしいと駄々をこねていた。人の所持品を漁る盗賊ような真似はしたくなかったけど、わたしは心の中で膨れ上がった気持が抑えられず、ついにルクシヤナと一緒になって彼の鞆の中を物色してしまったの。

入っていたのはエルフ、いやこの世界では在り得ない精巧に作られた品々。そもそも、これらの品を納めていた鞆からして到底エルフには作れない物だ。

そして、わたしは一番気になっていた品に手をかけた。

それは、エルフやハルケギニア人が使用する文字とは全く違う文  
体で装飾された、この世界では珍しい紙が束ねられて作られた手帳  
最初の頁には鮮明に描かれた彼の肖像画と文字、次の頁からは様  
々な色の判子が沢山押されていた。

「やっぱりこの人は……」

ここでわたしは確信した、間違いなくあの国からこの世界に来たのだ。ただ、海母の話から察するに、彼は自分の意志で来た訳ではないみたい。

突如、覇気のある怒鳴り声が洞窟中に響きわたった。彼が目を見まし、隣に居るルクシヤナの行動を止めようとしているみたいだ。

どうやらルクシヤナがまず目に付けたのは独特の光沢を放つ板のような物体だったみたい。きっと、彼女はそれを手に取っていつもの調子で調べたはず。本人は慎重に行っていたようだけど、それはもっと丁寧に扱わなければいけない代物。

わたしは彼女の手からそれを取り、扱い方の手本を見せてみた。彼もそれに満足してくれたのか、うんうんと頷いていた。

そんな彼を横目で見ながら、ルクシヤナはわたしに不満を漏らした。

「もう！何でわたしが蛮人の言う事を聞かなきゃいけないのよ！ねえ、アルティナ。そんなに慎重にならないで、もっといつもみたいに調べましようよ」

「ダメ・・・これはいつも見つけてくるような・・・物じゃない。それよりもっと・・・精巧だから」

「えー！？なんで蛮人がそんな物を所持しているのかしら。まさか本当に異世界からやって来た蛮人なの！？」

そう、彼は異世界に飛ばされて来たとびつきり不幸な旅行者、わたしとは似て非なる存在。

もし彼が大いなる意志の悪戯でここにいるとしたら、もしこの世界に見放され絶望の淵に立たされたとしたら・・・かつてのわたし

と同じになつてしまふかもしれない。

そしてもしそれが訪れた時、彼を支えてくれる存在がいなかったら……

まずは彼と会話してみようと思った。全てはそこから始まるはずだから。

第六話 異端者として

ここ数日でだいぶ体が治ってきた。もう少しで全開といったところだ。

今日の治癒当番は我が心の女神ことアルティナ嬢だ。彼女は会話だけでなく行動においても俺の心強い味方となっている。

エルフ社会の教養がどの程度かルクシャナから聞いていたが、アルティナは明らかに特異な存在だと思う。なぜなら、彼女はパソコンが使えるのだ。

いやパソコンだけじゃない、日用品から電子機器に至るまで使用法を知っており、使い方が分からないのは銃火器だけといった具合だ。

まるで初めから知っていたかのように使いこなすその様は感無量

の一言に尽きる。

「これ……この配列なら……もつと多種多様な要素を得ることが出来る……と思うの」

今は俺の親父が発見した”成分”の有益な利用法を模索すべく、二人でPC相手に奮闘中である。ルクシヤナの理解力も目を見張るものがあつたが、アルティナは次元が違う。思考展開と感性は俺以上、いやHIRAGA社研究員以上である。

さらに驚くことに、彼女は武芸にも秀でている。以前、ルクシヤナが俺に放つてきた魔法”百裂拳”チェント・アックア、なんとアルティナはその原型となる体術を考案し実戦で使用可能な段階まで昇華させたそう。他にも大人のエルフ達が知らない剣技を振るうという。

ここまでの癒しと才能を秘めた彼女を、俺は何の自重もせず地球にお持ち帰りしたい気分で一杯だ。

「すごいな、俺には到底考えつきそうにない。あと、ここはどうだ？」

「うん……これはわたしも同意見」

ちなみに俺は仕事となると口調が変わる癖があるのだが、ルクシヤナにより調きよ……もとい矯正を受け、今ではどんな状況でも一人称が”俺”となつてしまった。彼女曰く、

「ややこしいわ。”俺”か”私”かどちらかにしなさい。ああ、でも異世界の話をする時は丁寧かつ紳士な態度でお願いね」

とのこと、すごい矛盾を感じるのは俺だけか？なお、矯正の内容は控えさせていただく。あれは俺の異世界における黒歴史一号、語る事すらはばかれる。

それはともかく

「・・・？どうしたの？」

こてんと首を傾げて俺に話しかけてくるアルティナ。うん、いいぞ、非常に良い。何か別の趣味に目覚めそうな脳内艦隊を理性の武力で駆逐しつつ、彼女との会話を続ける。

あと念のため、俺の射程範囲はストライクゾーン±3歳だ、決して彼女に欲情などしていないということをここに宣言しておく。

「あ、ああ。アルティナは剣技や体術の心得があるって話してくれただろ？こういった座学だけでなく、体が治ったら実技の方もご教授願おうかと思ってね。俺はこれしか戦力がないからさ」

そう言っって手を拳銃の形にし撃つような動作を彼女に見せた。実は今の考えを悟られないようにするための苦し紛れな動作だった。

先程の思考を彼女に読まれるわけにはいかない。何せこの優秀さだ。彼女もルクシヤナや海母と同様に勘が鋭い可能性がある。

「わたしは・・・これでも二十代後半。わたしは・・・エルフの中

でも特に成長が・・・遅い」

「・・・すみません」

八八八、完全に読まれとるガネ。うん、そんな子狐みたいな切ない目で見ないでくれ、俺が悪かったから。あと自分の胸に手を当てながら、せめてルクシヤナくらいあれば、なんて咳かないでくれ。十分魅力的だから、貧乳はステータスだから。

「・・・それはともかく閑話休題、体術なら・・・今からでも教えられる」

「邪な事を考えてしまい、ごめんなさい！だからそんな怖い顔にならないで!？」

俺は初めて彼女に恐怖し、即座に日本伝統の土下座をした。俺の思考が、貧乳は・・・とい考えた辺りから、彼女の目が切ない子狐から獯猛な狼へと変貌したのだ。ついでに彼女の周りに青黒いオーラが見えている。

「野生動物の思考は・・・表情に出る。・・・考えを顔に出さない・・・特訓が必要」

「ルクシヤナ専用である俺の呼び名、野生動物がキターーーーー!？」

こうして女神の逆鱗に触れた俺は、特訓という名の私刑につき合わされた。まったくもって成長してない俺って、とほほ。

## 数刻後

「ごめんなさい。．．．やりすぎた．．．回復が必要？」

ようやく特訓が終わり、俺は肩で息をしつつ彼女に返事した。

「ゼーはーゼーはー、ああいや、さっきは完全に俺が悪かったからさ。ほんと、すまなかった」

正直、かなりきつかった。海母が考えてくれた鍛錬の内容が優しく思えるくらい。特訓中、どんな状態でも無表情でいてくださいってのも何気に辛かったな。無表情が崩れたら特訓を追加されて、いつの間にかこんなに時間が経っていた。

「一応、体力を回復させるから．．．横になつて」

彼女に言われるがまま、俺は地面に寝そべる。熱を放つ体にひんやりとした地面が接し、とても心地よい。そんな俺を見て、彼女はふふふと微笑みながら回復魔法をかけ始めた。

今の特訓、素人の俺が見ても、厳しいとはいえ内容はかなり充実していたと思う。マジに何者だ彼女は？実戦経験が豊富でなければこれ程の特訓を考え付くことはできないはずだ。

自分でも気が付かない内に俺は彼女に尋ねていた。

「しかし、パソコンの操作や特訓内容といい、どこで覚えたんだ？」

俺がその言葉を発した瞬間、彼女の体がビクッと反応した。拙い、どうやら俺はまた地雷を踏みかけてるようだな。いかん、すぐにフオローせねば。今、この子の気分を害することは絶対に避けなければならない。

「まあ、誰にだって話したくないことはあるよな。すまん、今の質問は忘れてくれ」

「うん・・・ありがとう、ヨシアキ・・・さん」

ふう、危ない。彼女は見た目通りかなり繊細だ。二人っきりのとき限定だが、彼女はルクシャナの決定を無視してまで俺の事を本名で呼んでくれる、気遣いの出来る良い女性なんだ。これ以上の信用を失うわけにはいかない。今後とも気をつけなければ。

「わたしは、あなたと・・・似て非なる存在もの。この世界の異端者イレギュラーとして・・・あなたを助ける」

目を閉じ地面に響く波の音を聞きながら、自分の迂闊な思考と発言を戒めるよう心に誓っていた俺は、彼女のその呟きを聞き逃して

いたのだった。

## 第六話 異端者として（後書き）

物語のヒント

胴長短足

一昔前の日本人はみんなこんな体型だった。  
つまりヨシユアは典型的な日本人体型。

トランクス  
下着

もしあの場面でヨシユアの下着がなかったら、ルクシャナにより完全に抹殺されていただろう。  
さよなら、文明。

大いなる意志

エルフや韻竜などが崇め敬っている存在。

お持ち帰り

可愛いモノに目が無い方は、よくこのように喋る。  
誘拐は犯罪ですよヨシユアさん？

百裂拳あらためチエント・アックア

100発の水弾という意味。

ルクシャナが百裂拳を魔法として完成させた際に、アルティナが名付けた。

ただし、ルクシャナはチエント・アックアより百裂拳の方がカッコいいという理由でなかなか呼んでくれない。

「この配列なら多種多様な要素を得る」

ヨシユアの親父が見つけた天然成分を他の成分と配合し新たな化学成分を作り出そうとしているようです。

作者は化学が苦手&勉強不足なので詳しく書くことはできなかった。無念。

### 黒歴史一号

内容は暴力的なR指定に入るので自主規制。作者が自分で書いててドン引きした。

一号と言っているからには二号、三号も今後出てきそう。

ヨシユア、頑張り。

貧乳はステータス

そして希少価値だ。

なお、ヨシユアにそっちの趣味は無い。多分。

### エルフの年齢

この作品では、人間に比べエルフは見た目の年齢が倍以上異なる設定です。

エルフ達の成人は約四十歳後半、つまりアルティナは人間の歳で十四〜十六といったところ。

土下座

日本の礼式のひとつで、土の上に直に坐り、平伏して座礼を行う。深い謝罪や請願の意志を表す場合に行われる。

さらに深い謝罪を求められ、焼き土下座なる儀式を行う場合もある。

野生動物

ルクシャナがヨシユアの愚行に対して怒りを露わにしたとき、彼をそう呼ぶ。

今回はアルティナもそう呼び、ヨシユアの迂闊な行動を抑止する大きな枷となった。

ヨシユア、自業自得だ。

アルティナの特訓

海母の鍛錬、アルティナの特訓は別話で詳しい詳細がわかる予定。実際、人間には無理。魔法の回復があつてこそその鍛錬、特訓。

ヨシユア、い？。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9753y/>

---

ゼロの使い魔 ~ 異世界奔走記 ~

2011年12月7日06時54分発行